

茅風

— Breeze from the field of thatch-grass —



2004年12月3日
森林塾青水
事務局便り
茅風通信 12号



山は暮れて

野は黄昏の

芒かな

蕪村

— 今号の目次 —

- 第4・5回講座「コモンズ村ふじわら」／小川進・・・1
○第4回；一日山伏体験・武尊登山
○第5回；散策道づくり
- 10月フィールド整備作業「せせ-ロードづくり」／池田登・・・3
- 団体受入プログラム；森林塾青水「とびっきり自然の旅」
○日本の心の原風景「深秋奥利根ロマン紀行」／川端英雄・・・4
○「飲水思源・深秋の奥利根ロマン紀行」に参加して／相川高信・・・5
○川端師匠の秀逸ジョーク録／糸賀幸子・・・6
- 11月フィールドスタディ「茅刈り作業・山の口終い」
○カヤ刈りとボッチ作り体験／井上康之・・・7
○森林塾青水フィールドスタディに参加して／阿部剛志・・・8
- 「地域資源調査計画」について／浅川潔・・・9
- 編集後記－塾長のつぶやき－

■第4回・5回講座「コモンズ村ふじわら」報告

小川進

◆第4回；一日山伏体験・武尊登山（9月18日～19日）

講座・コモンズ第4回目は上の原のフィールドからチョット離れて修験登山の「上州・武尊山」に登ってみました。武尊山は古来より奥利根一帯の信仰の山として敬われてきた歴史のある山です。標高は2158mと高くはないのですが、山頂付近の冬の訪れは早く、11月上旬には雪で白くなっているのが見られます。

水上町で計画した催事「一日山伏体験・武尊登山」にコモンズが合流する形で9月18日夜の講話から19日の登山が日程でした。

参加者の感想は後述してありますが、「貴重な体験をさせてもらった」「こんなに楽しい山行はなかなか出来るものではない」など好評でした。来年以降も是非つづけていきたいと考えています。

18日は「山伏修験の話」が中心でしたが制約もあり、「私語は慎む」「酒はダメ」など辛い思いをした人もいたようです。



◆第5回：散策道づくり（10月2日～3日）

第3回に続いての「道づくり」だが、今回は「散策道づくり」。リーダーの池田氏とともに下見をして2本のコースを決める。

①仮小屋から北にトラバースしてミズナラ林に入り少しずつ下ってゴルフ場の端に出るもの（コモンズ担当）と、②カヤ場北端側から北西にミズナラ林に入り①の道と交差して上り、岩場にでて左に曲がる（旧道）、またミズナラ林に少し入ったところで直角に左に折れて下り、①の道がゴルフ場に出る前のところで繋がる周遊コース（森林塾担当）の2本だが、カヤ場も含めて8の字コースとなるため色々な楽しみ方が可能になる。

作業は3班に分かれて、先頭が邪魔木伐採と草刈隊（力持ちチーム＝池田さんと高田さん＋堂前さん）に続いて整備隊（内野さん＋同奥様＋堂前奥様＋石田さん）最後が仕上げ隊（清野さん＋渡部さん＋小川）で、調査＆記録班が海老沢となった。

先頭と中堅が早く、仕上げ隊が追いつかない場面もあったが、1日で①のコースは完了。②のコースも森林塾草刈チームの強力部隊が半分くらいまで「やっつけてしまった」。残りは岩場部分の整備と①コースに繋がるところだが、これは明日に取っておくことにした。

キノコ鍋の夕食後、前回（一日山伏体験・武尊登山）の写真を写し、高田さんが名解説（アルコール効果＋キノコ効果）、これが大いに受けて盛り上がった。日本古来の山神信仰や山生活にまで話が及んだ。最終日は雨、しかし残りわずかのため「何としても完成させる」の強い意志のもと、全員がはやばやと仕度をしてフィールドに向かう。岩場の笹を刈り、最後のミズナラ林の道をつくる。予定より早く10時に済んでしまい、道具の手入れを丁寧にやってから物置にしまい込む（いつか道具の刃研ぎもキチンとしなければと思う）。「幸新」で山菜昼食を摂りながら感想文を書き、次回（最終回）に思いを馳せた。今回は作業内容も呑み込めていたせいかプレッシャーを感じることなく仕事を終わることができ、インフラ整備（緑の下作業）の大変さを痛感した。



■10月フィールド整備作業「セラピーロードづくり」

池田 登

今年の塾の活動も終盤に近づき、フィールド整備の一つである道作りを秋晴れの中開始、今回は、コモンズと共同作業である。周りの山々も少し色づき始め、澄んださわやかな秋の空気の中、山側のルート、ススキ草原のルートと、2つの作業となる。先頭は草刈機二段構え、後方は鎌部隊が手動の人海戦術で進んで行く。ルートに変化を持たせながら、うねりながら進む中大きな石にぶつかる。そこから右に入り、休憩場を整備する。樹木の木陰の「サークルお休み処」といった感じとなった。



さらに刈り進みミズナラ林の中に入ってゆく。なるべく木を切らないルート選びとなる。腐葉土でふわふわの土の感触が心地よい。しばらくして、山側のルート班が作った道にぶつかる。大きな石があるルートで一つのポイントとなる所である。「石舞台お休み処」とでもしようか。それから、山班、草原班合同作業である。ゴルフ場からなるべく離れながら、ササの斜面に分け入る。かなりの傾斜の中胸まであるササを刈りながら全員で進んで行く。一休みの時の一コマ、山ブドウを見つけ木に登る者、ツルを引く者、指示を出すだけの者、収穫した宝石のような秋の実りを満足げに見つめていた皆は、まるで子供のような無邪気なよい顔をしていた。気合を入れての再開、大きく

右にルートを取りしばらく進んだ時、林道らしき所にぶつかる。湯の小屋と上の原との山の林道であった。今ではほとんど使われていないようで明確なルートではないがこのルートも整備の対象とすることを皆で決定。こちよい疲れが体に残っていた。翌日の午前中を使い湯の小屋、上の原林道ルートの整備も完了し結果的に上の原フィールドをぐるりと周回するルートができあがった。それも大自然の中自然に近い道造り、まさに「セラピーロード」の完成である。これからもフィールドに参加してくれるであろう各種団体、ハイカーの人達がこのすばらしい散策道に心をとめて頂けるにふさわしいものになった。今後、他のルートも数年かけ作り上げてゆく事を皆で確認したフィールドスタディの2日間でした。参加した皆様ご苦労様でした。今後の展開が楽しみになってきました。



草もみじ ふじわら村は 幾百里

第6回目となる当塾主催の団体受け入れプログラム「とびっきり自然の旅」が、谷川岳に初冠雪を見た翌日の10月16日(土)から17日(日)にかけて催行されました。今年最後となった今回は、日本の心の原風景を訪ねる旅をテーマに「水源の神を語る会」の皆さんを中心に総勢22名が参加。最年少の小学校3年生から79歳の元気な日本の父、そして原先生ご夫妻やシンクタンクの若手研究者を含む賑やかにして多士済々な顔ぶれとなりました。

秋雨が心配されましたが、二日間とも好天に恵まれました。さすが日頃より「飲水思源」を旨とする同会ご一行の旅とあって、水神さまの厚いご加護があったようです。

ご案内役は、葉留日野山荘の若大将・高橋泉さんと、当塾が誇る川端、清水のベテラン・ツアーコンダクター2名!!

迷ガイドとジョーク(冗句)の連発のうちに、藤原の草もみじとクリ御飯にキノコ汁、そして、夜は原先生のスライドを使った名講話に満天の星空と美人の湯。全員、熊さんにも出くわさず奥里山の日本の秋を満喫していただきました。

題して『深秋、奥利根ロマン紀行』。以下、参加者の皆さんからの感想、レポートをお届けします。

◆日本の心の原風景 「深秋奥利根ロマン紀行」

川端英雄

誰が名づけたか「深秋 奥利根ロマン紀行」なんて、旅行業者もポッと頬を染めそうな、ちょっと心ときめくキャッチ・コピーに心よせた面々22名。

「水源の神を語る会」と「雨水市民の会」、「森林塾青水」の3サークルの混成初顔合わせながら、おたがい顔見知りも多そう。紀行の基盤が推し測られる。

10月16日(土)のお昼前、JR水上駅前で一同集合。湯の小屋「葉留日野山荘」2代目泉さんの運転になる、水資源開発機構から借用のマイクロバスと、柏倉一家の車に乗りこんでまずは藤原湖へむかう。

バスの窓からは前日初冠雪をみた谷川岳が、青い空をバックにくっきり映えている。藤原ダム湖に着く。およそ40年前にこの人造湖に「うちあがり・見沢・橋詰・余後・横山」の5集落が沈んだと。某ガイドが「水守りの像」のかたわらで、湖周辺話を一くさり。「・・・」中味は、よく聞こえなかった。

ダムのある平出^{ひらいで}～青木沢～一畝田と奥里山の田園風景の中を行く。めずらしく広くひろがる一畝田の田んぼで稲刈りをしているのが目にはいる。ガイドの名調子はまだつづく。やがてバスはサンワみどり基金「水源の森」に着く。1時だ。森はすこし黄葉。本格的な紅葉はもう1～2週間先かな?

ここで本業の民宿がいそがしい泉さんは、いったんバスで山荘へ引き返す。原先生ご夫妻もここで合流。

やや肌寒いなかで各自持参の弁当を開く。ぼくはおにぎり2個とパンを1個。みなさんは何をお召し上がりかなあと、目をすこし動かす「ウン、うまそうだな!」。いつもながら利他行を実践の岡田さんのあついコーヒーが身にしみる。

森をすこしはといって方丈庵に着く。豪雪につぶれぬよう組み立て式になっていて、これから解体の予定と聞いて、あらためて堅固そうな木小屋をみる。

お弁当の後は中島貞一さんが復旧された炭焼き窯だ。窯穴に原先生がカメラをさしいれて、しきりに首をひねっておられる。「シャッターが下りないのだけど、分かりますかね?」と問われても、ICのかたまりの故障には、ぼくも首をすくめるだけ。利根川支流・湯の小屋沢川にそって、山荘まで walking。舗装道路の川べりにどんぐりがいっぱい。「なぜこんなところに?」と見あげると、そこにはミズナラの木などが覆いかぶさっていた。熊が出てきたら「ほら、ここにいっぱいあるよ!」と教えてあげたのに。ホイ、熊よけのベルを腰につけていたのを忘れていた。三々五々の隊列が目いっぱい伸びきったころ、山荘に着く。南極男・安井さんの顔も見える。全員集合だ。



朝日岳の初冠雪と明川集落

ひと風呂浴びて6時から夕食。そして、7時半から場所を変えて交流会兼学習会。いつの間にか押しかけた広川さんがなにくわぬ顔で着席。テーブルには原先生・南極男・広川さん・泉さんからの差し入れの酒がならぶ。うーん、どれから飲もうかな？でも、今夜の食事の秀逸はなんといっても、南極の氷。南極男のおみやげ。コップのなかで「ピシツツ・ピシ」とかすかに鳴る音を聞きながら、しばし氷のでき始めた数千年まえを想う。ふと気がつくと、柏倉さん心づくしの缶入りメグスリノキ茶が並んでいる。タンと召し上がった原先生の、ひときわ流麗なレクチュアがはじまる。「風景は風土・文化の基層です。要素の積み重ねでは社会を変えられないけれど、いま日本には風景を築こうというおおぜいの若者がでてきた。あしたの日本の農林業はあたらしい価値観をもつだろう」。気持ちがワクワクしてくる、明るく・力強いおはなしだった。美人の湯にゆったりつかって目覚めれば蒼天。

ゆっくり朝食をとって9時出発。泉さん運転、ガイドつきのバス紀行がはじまる。おなじみ「ふるさと郷土館」に着く。森林塾・青水のパンフレットの写真にも登場の、まさに原風景が視野一面にひろがる。雪をいただく谷川岳もみえる。猿よけの強電柵？のかたわらで原先生の即席講座がはじまる。「精神形成の場となる原風景の維持再生には、役所もうごき始めている。日本人はこういうときに動く」。昨夜もそうだったが、こころの底から勇気が湧いてくる。奥さまがまぶしげに、ひかえめに先生を見つめておられた。

昼食は森林塾・青水のススキ高原で。ミズナラやブナの林間を散策して、食欲も嵩じて来たころ‘気ママ屋’ヤン・ママグループになるあったかい赤米ごはん。ヘー、すい



サンワみどり基金 {水源の森} にて

とん（水団）もある。終戦後を思いだす。休みにもかかわらず、役場の木村さんも顔を出してくれる。

帰りみち、慶応年間創建の応永寺に立ちより、清水ガイドから「縛られ竜」などの話を聞く。車窓に^{もみり}師入の奥里山景観をたのしみつつ、JR水上駅前につく。解散。三グループによる「三位一体」のロマン紀行2日間がおわった。

‘木の精^きか 中高年らの 若やいで’ (冗句)

◆「飲水思源・深秋の奥根ロマン紀行」に参加して

相川高信 (UFJ 総合研究所)

ススキ草原のどこか懐かしく雄大な景色の美しさは予想以上のものでした。こんな貴重な生態系が残っているのを目の辺りにして、正直私は感動しました。しかも、これが人が手を加え、自然の恵みを得るプロセスによって生じた、「景観」であると思うとより一層、感慨も深くなります。なるほど、これが原先生の言う「風景」だということなのでしょう

か。得るものが多かった二日間でしたが、やはり何よりも、「飲水思源」という考え方に惹かれて集まった人々と出会うことができたことが、最大の収穫だったと思います。草花、俳句、雨水、南極、目薬の木・・・非常に多彩な人材が一堂に会する場があるということは、本当にすごいことです。



石碑「飲水思源」の前で

特に社会人の駆け出しである私にとっては、諸先輩方の、充実した穏やかな笑顔の背後にある物語（これも「風景」の一つですね）を感じることができたことは、何にも替え難いことでした。

森林ボランティア、里山保全活動は全国でますます活発化しています。色々な世代の力、知恵を活かしていくことで、よりよい活動を展開できるのではないかと、そんなこと自然と考えて帰ってきました。

持続的な地域社会をいかに構築していくか、が私の大きなテーマです。それには、まだまだ現場経験が足りないことを痛感する日々です。今回参加して得ることができたことを、より深めていきながら、日々の仕事、そして自らの活動に活かしていきたいと思っています。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

「森の思いで」

柏倉祐吉くん
(栃木第一小学校3年)



◆川端師匠の秀逸ジョーク録

糸賀幸子(雨水市民の会)



森を出てススキ草原への小径

上毛高原駅を降りるまで見ていたのが画家の川端竜子の本で、そのあとすぐ紹介された川端さんだった。つい関連づけて、「ご親戚かも？」とドジな発言。彼は真面目な顔で頷いた。「父方なのですよ。母方が川端康成の」。驚く私にニヤッと笑顔。川端ジョーク=冗句の最初の洗礼だった。

水上駅で降りた人たちと合流して、バスは一路サンワみどり基金「水源の森」へ。谷川岳がうっすらと雪化粧している。見晴らしの良いところで小休止。清水さんは先日、ここで絵を描いたそうだ。「その時、カモシカを見ましたよ。たぶんカモシカだったと思いますがね」。するとすかさずどこかで「かもしれない!!」。

近くの雨呼山には雨があんまり降るので、竜を縛ってお寺の天井裏に隠した伝説があるという説明には「竜を隠したりゆう(理由)?」。

「UFJ環境財団(もと・サンワみどり基金)水源の森」。清流が音たかく流れ、森は微笑んでいるようだった。林業を学んだという相川さん(UFJ総合研究所)から、小学生の柏倉祐吉君たちと木の名前をいろいろ教えていただいた。「メグスリノキの葉は、こんなふうに対生についています」。「ふ〜ん」と私たち。川端さんは「小生はしらなかったなあ」。「ハリギリの下の方に鋭いトゲがあるのはカモシカ等の害を防ぐためです」と清水さん。間髪を入れず「シカとは分かりませんが」。



柞(ハハソ)の泉で坊やお水取り

ジョークは伝染するものなんですね。水源のそばに小屋があって、ドアにすてきな取っ手が付いていた。「とってもいいね!」と私同様、初参加の高橋さん。更に「コケでこけた」などを連発。

翌日は、「森林塾青水」の森へ。暖かい日差しがススキの草原と森をきらきらと照らしている。お昼は地元の若いお母さんたちが出張して作ってくださった。とても美味しかったが、メニューのうち卵とじがコンロを一つ忘れたためできなかったとか、謝っておられた。我等が川端さん、最後の一発。「コンロよろしくね!」。

思い出すと、溪流の音と共に「アハハ、アハハ」という声が蘇る。 <どんぐりの帽子 どなたの忘れ物> 青水

最後は、青水こと清水さんの冗句(ジョーク)ならぬ、季語も入った立派な俳句(ハイク)でしめくくり。

以上、深秋・奥利根ジョーク紀行(!!)の一節でした。

◆カヤ刈りとボッチ作り体験

井上康之(林野庁)

すがすがしい秋風の中、森林塾会員、講座コモンズの皆さん、そして地元の方々と共にカヤ刈りとボッチ作りに汗を流しました。紅葉狩りには少し遅かったようですが、青く透き通る空をバックに金色の茅が風にたなびく姿は、本当にすばらしいものでした。

当日、不意の交通事故渋滞に巻き込まれ、私と息子（湊太：小学4年生）が現地に到着したときには、みんな午前中の作業を終えたときでした。余裕をもって家を出るべきだったという反省の念とともに、名人（地元古老と町田工業さん）の指導を受けられなかったことが残念でなりません。



何はともあれ、特製のかぼちゃ弁当で腹ごしらえ。地元の産物ヤーコンがいろんな形で調理され、秋の紅葉と茅場をイメージした盛り付けに工夫が凝らされています。なんとデザートのカレーにまでもヤーコンが使われているとは驚きでした。

午後からは先ず「上の原クリーン作戦」、地元ボランティアの方々と交えてのごみ拾いです。入り口や道路沿いには、多少のゴミが落ちていたものの、山中にはほとんど見当たりませんでした。新たに設置された入口の看板を見て、山に入る方々の意識が少しなりとも変わってきたせいもあるのでしょうか。



さて、いよいよ、今回初参加の井口さん（農林漁業金融公庫）のにわか仕込みの教えのもと、カヤ刈りを開始。「一抱え分のカヤを持って・・・」とは言うもののカヤはなかなか言うことを聞いてくれません。大きく抱え込んだものの、実際に刈り取ったカヤはその半分、長さもマチマチというありさまです。

次に刈り取ったカヤ5束を使ってボッチ作りに取り掛かりました。最初の疑問は、「どうしてわざわざボッチなど作らなければいけないのだろうか？」ということでした。いろいろ聞いてみると、やはり昔ながらの知恵が盛り込まれているようです。即席で理解したところでは、①風が通って乾きやすいこと、②雨が降っても中身がぬれないことがポ

イントのようでした。なるほど、プロが作ったものは、下の方には十分な隙間があり、天辺の屋根様の部分はしっかりと結ばれています。そして何よりも大きな違いは安定感でした。

みんなで力を合わせて作ったボッチは、ざっと100個ほどだったのでしょうか。地元の古老によれば、一日一人当たり40～50個のボッチをつくるといいますから、今回参加の総勢30人ほどで古老2人分のボッチを作ったことになります。

最後に、6月に行った「山の口開け」と対にした「山の口終い」の儀式です。山の恵みと作業を安全に終了できたことに対する、山の神様への感謝の意を込めて「森林塾バージョン」で行われました。地元の収穫祭をまねたというからには、カヤ収穫の感謝の意味も含まれているのでしょうか。参拝の方法は「二礼二拍手一礼」と言葉ではわかっている、なかなか体がついていきません。慣れない手つきでの山の神様へのご挨拶でしたが、きっと気持ちだけは伝わったのではないかと信じていたいものです。

私にとって、今回の行事は、今年の森林塾の野外プログラムを締めくくるのに大いに満足が行くものでした。子供にとってもカヤ刈りは初めての体験であり、心に残る思い出になることでしょう。来年また火入れをし、継続的に茅刈を実施することで、より良いカヤ場と地域との交流の芽が育ってくれることをますます期待したいものです



■晩秋の茅刈り、ボッチづくり

東京の紅葉がまだその気配を見せていない 11 月上旬、利根川の上流、標高 800m の群馬県水上町藤原地区では既に紅葉はピークを過ぎて、辺りの山々は冬支度を急いでいた。

私は今回、この藤原地区にある上ノ原フィールドというスキ原で茅刈りと「ボッチづくり」に励むこととなった。茅刈りとその利用過程を体験したいと参加させていただいた今回のフィールドスタディであるが、「ボッチ」とは何かということも知らず、かといって聞くのも恥ずかしく、当日を迎えてしまった。

「ボッチ」とは、作業を終えた今も詳しいことはわからないが、要するに刈った茅束を利用しやすい乾燥状態にするために、茅場につくる工作物といったところか。見た目は雪んこのようでかわいい。これが刈ったフィールドにいくつも林立していく姿は、何かの遺跡のようで壮観だ。

腰を曲げる茅刈りの作業に疲れ、ふと腰をあげると、谷の向こうには雄大な谷川岳から朝日連峰の風景が目飛び込んでくる。晩秋にしては暖かな風と優しい太陽の光がフィールドを包む。さすがにしき晩秋の一日。

■入会・コモンズ

茅刈りはその動作自体は稲刈りと似ている。ただし、刈ることを目的に植えている稲と異なり、自生する茅はその集積密度が低いため、一束を刈り上げるためにかなりの面積を必要とする。だから、ある一軒の家を葺き替えるには、その屋根の面積からは想像もできないくらい広い面積の茅場を必要とするらしい。

昔の人は、その広い面積を“入会”という制度で維持管理してきたという。茅は家を守るため不可欠な材料であったが、かといって毎年葺き替えるわけでもなく、そのために個人で茅場を維持管理するには効率が悪い。そうして、茅場は個人ではなく、集落全体で維持管理されてきたという。

そして、高齢化と人口減少の中、集落独自での維持管理能力が失われたこの集落で今、都市住民との交流・連携によって、この茅場の維持管理システムを構築しようと試みているのが、この活動の一つの主旨の一つになっている。イギリス発祥の“コモンズ”という概念を用いて、現代版の入会による茅場の維持管理を実践しているのである。しかし、活動には課題も多いという。フィールドスタディ当日の晩には、宿でお酒を入れながら、会や活動の課題について、白熱した討論が展開された。みな、それぞれの立場で、この活動への想い、提案を交わす。

■子どもを交えた活動へ

その討論の中で、大きな課題として取り上げられていたのは、地元参加者が少なく、都市と農村の連携による現代版入会制度の“パートナー（地元の体制）”がまだ確立できていないことであった。会としては、地元藤原地区の区費の納入、地元民宿の利用など、積極的な連携に努めているようだ。しかしながら、地元からの反応はイマイチであるという感想が何人からも聞かれた。

私はこれまでいくつかの都市農村交流の現場にお邪魔してきたが、都市と農村双方が積極的に自発的に活動している事例に共通して見られる姿は、都市側の参加者に、子どもや若い女性がいることだと感じている。活動テーマの意義といったことを抜きにして、活動に活力があるか、参加している人が楽しんでいるかといった視点で見たとき、この傾向は間違いなく当たっていると私は思う。その理由を、私は次世代への“希望”だと思っている。子ども

も若い女性も未来への希望の象徴だ。活動の現場に子どもの笑い声が響き渡り、地元の人に自然と挨拶する風景が増え、その上で今も実践されているような地元への働きかけがあれば、自然と地元の人の関心は増えてくると私は思う。今の活動が子どもと若い女性という参加者を得たなら、より素敵な活動に前進すると思う。私も微力ながらそういった層を引き連れて参加したいと思う。

活動を終え、東京のオフィスに戻り、業務に向き合いながら、私はふとこんなことを想い描いている。



藤原地区地域資源調査の第一回現地調査として、以下のようなプログラムを行います。

- 目 的
 - ①上ノ原フィールド以外の藤原地区・水上町の現況を知る。
 - ②行政から観光・地域資源の状況等の情報収集、資源の活用方法について意見交換をする。
 - ③地元住民に地域資源調査実施内容の説明をおこない、調査の協力をお願いし、地域資源活用についての意識確認をする。
 - ④水上町・地元藤原地区に今年の塾の活動報告を行う。
- 日 時 平成16年12月5日(日)～6日(月)
- 宿泊場所 「ロッヂ樹林」 tel0278-75-2040
- メンバー
 - 森林塾青水：高野・川端・清水・海老沢・多葉田・浅川・広川・中島
 - 水上町：町長・収入役・観光商工課・農林建設課・教育委員会
 - 藤原地区：田園構想委員・藤原案内人クラブ・区長・民宿組合長・他
- スケジュール

日	時 間	内 容
5 日 (日)	7:20	上野駅発 水上1号(大宮駅7:45)
	9:42	水上駅着
	10:00	谷川温泉街 湯テルメ、広池学園保養所、天一美術館、NPO 奥利根文化芸術アカデミー(水上山荘社長面談)など
	12:20	昼 食 山彦食堂(うどんがおいしい) 移動しながら(湯檜曾、土合)
	13:30	藤原湖・あゝ湖底の故郷館・奥利根民族集古館
	14:10	藤原中区 街歩き 十二さま・能舞台・諏訪神社・小中学校 現地事務所
	17:00	宿泊地 民宿 到着
	18:00	夕 食
	19:00	地元意見交換会(田園構想委員会・区長・民宿組合) 今年の活動報告(スライド+資料)と地域資源調査の説明、意見交換
6 日 (月)	8:30	宿泊地 出発
	9:00～	観光協会訪問 須藤専務
	10:30	水上全体の観光状況、藤原地区の状況
	10:30～13:30	水上温泉街散策(自然遊学・気まま屋) 昼 食(そば屋荒井、そばだんご名物)
	13:30～	水上町役場(観光商工課・農林建設課・教育委員会) 町の取り組み姿勢、町の状況(観光・自然など)資源情報提供、活用策等について意見交換
	14:30～	町長・収入役に活動報告(スライド+資料)
	16:40	水上駅発 水上8号
	19:00	上野駅着 大宮着18:22

編集後記ー 塾長のつぶやき ー

八月中旬から九月中旬までの一ヶ月間、フィールドでの活動を休止。九月下旬、東京よりひと月早い秋の訪れを待って再開。今号でご報告のごとき様々な活動を展開、今年度に計画したフィールドワークのほとんどを消化。皆さん夫々に、様々な出会いと感動を体験されたと思う。小生なりに特に感銘したこと、以下三点。

その一、嬉しかったこと。柏倉さんご一家三代が打ち揃ってご参加くださったこと。六頁で紹介した絵『森の思い出』はお孫さんの祐吉くんの作品。おじいちゃんの實さんからは後日、「実現可能な夢にむかって邁進せよ」と励ましのお便りまで頂戴した。

その二、申し訳なく思っていること。原先生ご夫妻のご来遊とご講話に何のお礼も出来ないでいること。沢山の素晴らしいスライドを使い、我が国固有の水と森の風景論を熱く語っていただき、全員大いなる感銘を受けた。(川端、相川両氏のレポートご参照)。今後の実践活動の積み上げをもってご恩返しするしかなし、と思っている。

その三、有り難がたかったこと。前途有為の若者たちの参加と貴重なご意見を得たこと。相川、阿部の両兄(共にU F J総合研究所アナリスト)から「色々な世代の力、知恵を活かすべし。特に、都市側の参加者に子どもや若い女性を」といった示唆に富むお便りをいただいた。(両兄のレポート、ご参照)。肝に銘じて、今後の活動に反映していきたい。

フィールドは既に冬眠中。やがて、雪景色に。この一年の感動と学びを大切に、来る年と次世代につないで行きたいもの。

思い出のキラリと光る枯野かな

真砂女

(青)